



日本植物分類学会 ニュースレター

No. 49

May 2013

今号のトピックス

2013 年度野外研修会が、8 月 31 日～9 月 2 日に
広島県八幡高原で開催されます。

11 月 6 日～7 日に韓国で開催される日中韓国際シンポジウムの
招待講演候補者が募集されています。



目 次

諸報告

2013 年度大会発表賞の報告	2
大会発表賞受賞者喜びの声	2
庶務報告 (2013 年 2 月～4 月)	5
2013 年度第 1 回評議員会議事抄録	6
2013 年度総会議事抄録	8
2013 年度事業計画および予算	10
牧野富太郎生誕 150 年記念展「植物学者 牧野富太郎の足跡と今」 開催のご報告	13

お知らせ

2013 年度野外研修会のお知らせ	14
日中韓合同シンポジウム (2013) の案内 (予告)	15
日本植物分類学会第 13 回大会のお知らせ	15

寄稿

大学連携バイオバックアッププロジェクト (IBBP) — 誰もが利用できる生物遺伝資源のバックアップ拠点形成 —	16
---	----

植物研究会・同好会紹介

「すげの会」	18
--------	----

会員消息

会員消息	19
------	----



諸報告

2013 年度大会発表賞の報告

大会発表賞選考委員長 副島 顕子

日本植物分類学会第 12 回大会において優れた研究発表を行った若手研究者に授与する大会発表賞は、次の 5 名に決まりました。(五十音順)

口頭発表部門

柿嶋 聡(静岡大学・創造院)「周期的一斉開花が引き起こす非対称な種間交雑」

高山 浩司(東京大学・博物館)「種分化様式の違いに着目した海洋島固有種の遺伝的多様性の時空間的変遷の解明」

藤浪 理恵子(筑波大学・生命環境)「シダ植物小葉類の根頂端分裂組織の比較解剖学」

ポスター発表部門

鈴木 雅大(東京大学)「日本産紅藻ベニスナゴは複数の隠蔽種を含む」

瀬尾 明弘(京都大学)「日本産セリは少なくとも 2 種にわかれる」

今回の大会では、口頭発表 30 題、ポスター発表 22 題のエントリーがあり、審査の結果口頭発表では 3 点、ポスター発表では 2 点の演題が受賞対象となりました。選考委員会のメンバーは会長および評議員と前大会での発表賞受賞者で、今年は合計 11 名でした。採点方法は、研究内容について 5 点、発表のうまさについて 3 点の合計 8 点満点で採点し、その平均点をもとに委員の合議で受賞者を決定しました。

受賞者だけでなく他の方々の発表にも優れたものが多く、審査会では時間ギリギリまで真剣な議論が交わされました。意欲的な発表が多く、賞の存在意義が高まってきたことが感じられます。受賞者の方々にお祝いを申し上げるとともに、今後よりいっそう充実した研究を成し遂げられることを期待します。選考には、委員はもとより学会幹事や大会準備委員会に大変お世話になりました。この場を借りてお礼申し上げます。

大会発表賞受賞者喜びの声

ニューズレター幹事 海老原 淳

年々エントリー数が増加し、発表のレベルアップも著しい大会発表賞。今年の激戦を勝ち抜いた 5 名の方々に、ちょっと答えにくいかもしれない裏事情まで含めて 11 の質問をしました。来年度エントリーされる方々、是非じっくり読んで参考にされてはいかがでしょうか。

質問

- ① 現在の研究テーマ
- ② 今回の発表内容の要約
- ③ 植物分類学会会員歴
- ④ 過去の大会発表賞受賞歴(筆頭発表者としての回数)
- ⑤ 過去の植物分類学会大会での発表回数(筆頭発表者としての)
- ⑥ 人生での筆頭発表者としての学会発表回数
- ⑦ 今回発表した研究に要した時間
- ⑧ 今回の発表準備に要した時間
- ⑨ 自分の発表賞受賞について
- ⑩ 今回発表した内容の公表
- ⑪ 今後の発表賞エントリー者へのアドバイス

「周期的一斉開花が引き起こす非対称な種間交雑」

柿嶋 聡 (静岡大学 創造科学技術大学院 特任助教 [任期あり, 3月まで], 日本学術振興会 特別研究員 PD [任期3年, 4月より, 所属は変わらず])

- ① 周期的一斉開花植物の進化史の解明
- ② 6年に1度一斉開花枯死するコダチスズムシソウと毎年開花するオキナワスズムシソウの非対称な交雑を集団遺伝学的解析から明らかとした。シミュレーションの結果、非対称性の要因は周期的一斉開花であった。
- ③ 約7年
- ④ 0回
- ⑤ 3回
- ⑥ 約15回
- ⑦ 約5年
- ⑧ 約6時間 (過去の発表でも使用したスライドの作成時間は含まず)
- ⑨ 受賞の可能性はあると思っていた
- ⑩ 一部は既に論文として出版されているが、主要な部分は現在論文を準備している
- ⑪ 内容を詰め込みすぎずに、もっとも伝えたい結果を理解してもらうためにはどのように説明すれば良いかを考えて発表を作り、はっきりとした口調で説明するのが良いと思います。



コダチスズムシソウの花

コメント：ちょうど調査シーズンと大会が毎年重なってしまい、なかなか参加できませんでしたが、久しぶりの発表で初めての発表賞が取れてとてもうれしいです。

「種分化様式の違いに着目した海洋島固有種の遺伝的多様性の時空間的変遷の解明」

高山 浩司 (東京大学総合研究博物館, 特任助教 [1年更新の最長3年])

- ① 海流散布植物の系統地理と海洋島固有種の種分化に関する研究
- ② 海洋島固有種の遺伝的多様性の時空間的パターンを決める要因は何かという問題に対し、ファンフェルナンデス諸島の固有種に着目した解析を行い、cladogenesis と anagenesis という種分化様式の違いが重要であることを示した。
- ③ 約12年
- ④ 1回
- ⑤ 7回
- ⑥ 約30回
- ⑦ 約2年
- ⑧ 約24時間
- ⑨ 受賞の可能性はあると思っていた
- ⑩ 現在論文を準備している
- ⑪ 何故ボディビルダーは鏡を見ながら筋トレをするのでしょうか？ナルシストだから？それも大いにあるかも知れませんが、彼らは自分のフォームを常に確認しながら筋トレをしています。発表賞へエントリーすることは、審査員や聴衆に自分の発表がどう映るかを強く意識しながら発表を構築できるというメリットもあります。エントリー資格がある限り積極的に挑戦することをお勧めします。



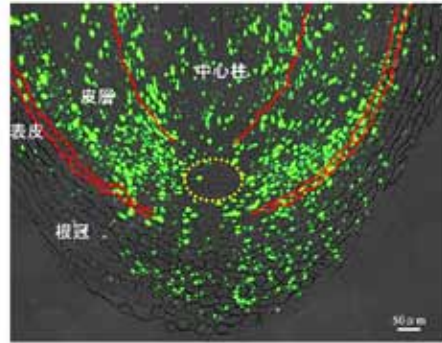
本研究を実施したウィーン大学時代の共同研究者：(左から) Tod F. Stuessy, Josef Greimler, 私, Patricio Lopez Sepulveda

るのでしょうか？ナルシストだから？それも大いにあるかも知れませんが、彼らは自分のフォームを常に確認しながら筋トレをしています。発表賞へエントリーすることは、審査員や聴衆に自分の発表がどう映るかを強く意識しながら発表を構築できるというメリットもあります。エントリー資格がある限り積極的に挑戦することをお勧めします。

「シダ植物小葉類の根分裂組織の比較解剖学」

藤浪 理恵子 (日本女子大学 理学部 物質生物科学科, 助教 [任期 4 年])

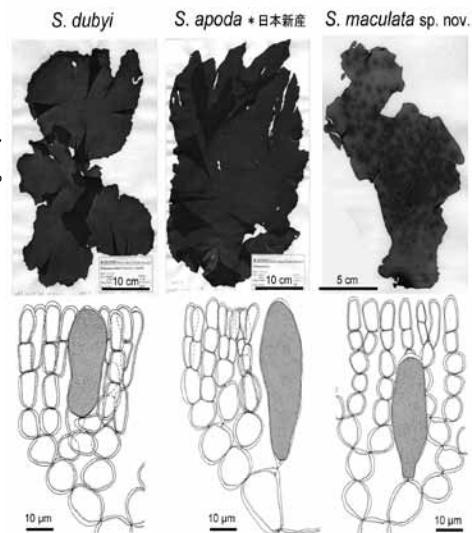
- ① シダ植物小葉類の分枝の形態進化
- ② シダ植物小葉類の根頂端分裂組織の構造は頂端細胞型や層状型だけでなく、開放型を示すグループも存在し、静止中心に似た構造をもつ可能性が示唆され、真正葉類に匹敵する多様な根の構造を進化させたと推測される。
- ③ 約 9 年
- ④ 0 回
- ⑤ 5 回
- ⑥ 約 13 回
- ⑦ 約 5 年
- ⑧ 約 1 週間
- ⑨ 全く予想していなかった
- ⑩ 現在論文を準備している
- ⑪ 今回の研究発表は、毎日コツコツ切片作成と顕微鏡観察を行い、丹念に積み上げてきた成果の賜物です。一見地味な作業ですが、塵も積もれば山となる、ということを決意して今回の受賞で改めて痛感させていただきました。ぜひ毎日丁寧に自分の愛する研究テーマを育ててください。

ヒカゲノカズラの根頂端分裂組織（開放型）のBrdU像と位相差像の重ね画像
点線部はBrdUの取り込みが少なく、分裂頻度の低い領域（静止中心様領域）

「日本産紅藻ベニスナゴは複数の隠蔽種を含む」

鈴木 雅大 (東京大学 大学院 理学系研究科 生物科学専攻, 特任研究員 [1 年契約])

- ① 紅藻汎存種の分類学的研究。特に、外国産種と混同されている日本固有種や隠蔽種の正しい種の認識と記載
- ② 形態観察、生態、分子系統解析を基に、日本産紅藻ベニスナゴ属 (*Schizymenia*) を、汎存種ベニスナゴ (*S. dubyi*)、日本新産種 *S. apoda* と新種 *S. maculata* の 3 種に整理した。
- ③ 3 年
- ④ 0 回
- ⑤ 2 回
- ⑥ 22 回
- ⑦ 約 4 年
- ⑧ 約 2 週間
- ⑨ 全く予想していなかった
- ⑩ 現在投稿論文を準備中
- ⑪ アドバイスを出来るほど実績を積んでおりませんで、アドバイスに変えて今回の受賞に関する自己分析を紹介させて頂きたいと思います。

日本産ベニスナゴ属 (*Schizymenia*) 3 種の標本写真と腺細胞

これまで、私は体構造、生殖器官の形成過程などを余すところなく観察し、網羅的な形態観察結果を中心に据えて発表をしてきました。「たくさんの形態データ+難解なステージの観察」が私の売りでした。しかし、本学会に入会してから、私から見てどんなに重要なステージであっても、専門家でなければ理解出来ないような発表では独りよがりではないとい

うことに今更ながら気が付きました。今回のポスターでは、「人に分かってもらうための発表」を大前提に、以下の3点を工夫しました。1) 初めて紅藻を目にする方に、紅藻という生き物を実感してもらうべく原寸大の標本写真を載せる、2) 誰が見ても明らかな形態の特徴だけを載せる、3) 垂直分布や季節的消長など、紅藻を知らない方にも分かり易い生態学的なデータを示す。ポリシーを変えて、分かり易い発表を心掛けたことで、紅藻というマイナーな生物にもかかわらず、多くの方に評価して頂けたのだと思います。

コメント：対象とする生き物に真摯に向き合い、詳細な形態観察と、生育地の現場の様子などを基に種を認識・分類するスタイルは、恩師である故吉崎 誠 博士（東邦大学名誉教授）から受け継いだものです。師が急逝されてから1年半、師と同じスタイルが評価され、賞を頂けたことは殊更に嬉しいです。唯一人の継承者として、今後も紅藻の分類を継続していきたいとの思いを強く致しました。

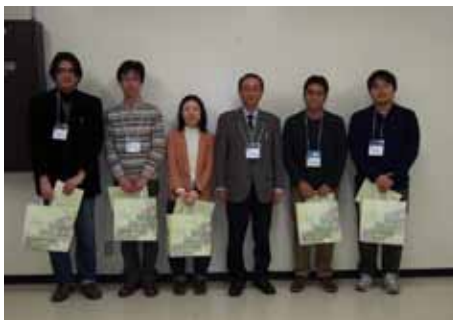
「日本産セリは少なくとも2種にわかれる」

瀬尾 明弘（龍谷大学、非常勤講師 [任期1年]）

- ① 東アジア島嶼域において複数の植物種間の遺伝構造を比較およびその成立過程の解明
- ② 形態・生態形質・分子情報を比較することによって日本産のセリは少なくとも2種にわけて認識することが自然であることが明らかとなった。
- ③ 約15年
- ④ 0回
- ⑤ 9回
- ⑥ 約20回
- ⑦ とぎれとぎれに十数年
- ⑧ 約20時間
- ⑨ 全く予想していなかった
- ⑩ 現在論文を準備している
- ⑪ 植物の多様性の謎を丁寧に紐解き、整理する。



林道脇に生育するサケバゼリ（沖縄本島北部）



左から、鈴木さん、瀬尾さん、藤浪さん、角野会長、高山さん、柿嶋さん

おめでとうございます！

庶務報告（2013年2月～4月）

庶務幹事 志賀 隆

以下に掲載する「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律（種の保存法）に改正に関する意見書」を石原伸晃環境大臣宛てに提出した（3月22日）。また、意見書の内容を学会ホームページに掲載した（3月28日）。

2013年3月22日

環境大臣 石原伸晃 殿

日本植物分類学会
会長 角野康郎

絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律（種の保存法）の改正に関する意見書

貴省の生物多様性保全への取り組みに対し、敬意を表します。

さて、私たち日本植物分類学会は、環境省のレッドデータブック（植物）作成のための現地調査を請け負うなど、絶滅危惧種の保全に関して学会を挙げて協力してきました。種の保存法の指定種の調査にも、当学会員が関与しています。今般、同法の改正が進められようしていますが、より実効性のある法整備と施策の実現のために、ここに意見を表明させていただくこととしました。今回の法改正に活かされるように検討をお願いするものです。

提言① 科学者からなる専門委員会の常設を法改正に盛り込む

現行法では、国内希少種の選定過程の透明性と実効性が十分に担保されていません。種の絶滅リスクや指定による保全効果を科学的に検討する常設の科学委員会（仮称）を設置し、委員会の具申を受けて国内希少種を指定する仕組みを設けることを提案します。それによって種の保存法は絶滅危惧種を保全するための中核的な法制度になるものと考えます。

提言② 生育・生息地等保護区の制度強化を法改正に盛り込む

生育・生息地の破壊が種の絶滅の最大の原因になっていますが、現行法における生息地等保護区は限定的と言わざるを得ません。種指定とともに場の保全を保証する制度が不可欠であると私たちは考えています。全ての生物種は他の生物とのさまざまな相互関係の中で生きているという視点も生物多様性の保全には不可欠です。指定種の効果的な保全を可能にするためには、保護区の指定を推進していく仕組みが必要です。

提言③ 絶滅危惧種の調査研究・モニタリング体制を強化する

絶滅危惧種の保全においては、現状を長期的にモニタリングし、変化に迅速に対応することが求められます。植物に関しては、全国各地の在野の研究者の献身的な協力によって現地調査が支えられているという実態があります。このような活動を支援する自然史博物館等の施設も十分に整備されていない地域が数多くあります。今後、環境省としても絶滅危惧種の調査研究とモニタリング体制を強化するための施策を検討いただくように要望するものです。種の保存法における新たな種指定あるいは解除を促進し、保全事業の効率を高める上でも、このような体制の強化は不可欠と考えます。

以上、ご高配いただければ幸いです。

2013年度第1回評議員会議事抄録

庶務幹事 志賀 隆

会場：千葉大学西千葉キャンパス構内 けやき会館

日時：2013年3月14日 16:30～19:00

参加者

評議員：()内は被委任者

出席 [10名]：西田佐知子，村上哲明，秋山弘之，池田博，大村嘉人，梶田忠，田村実，西田治文，仲田崇志，副島顕子

委任状出席 [2名]：永益英敏(西田[佐])，藤井伸二(角野)

幹事会・委員会委員長：()内は役職

出席 [13名]：角野康郎(会長)，志賀隆(庶務)，保坂健太郎(会計)，鈴木武(図書)，海老原淳(ニューズレター)，田村実(編集委員長・英文誌編集)，東浩司(和文誌編集)，西田治文(自然史学会連合)，岡崎純子(講演会)，西野貴子(野外研修会)，樋口正信(絶滅危惧植物専門第二委員会委員長)，伊藤元己(植物データベース専門委員会委員長)，高宮正之(学会賞選考委員長)

欠席 [4名]：大橋広好(国際植物命名規約(メルボルン規約)邦訳委員会)，奥山雄大(学術会議若手アカデミー担当委員)，黒沢高秀(植物分類学関連学会連絡会・日本分類学会連合)，藤井伸二(絶滅危惧植物専門第一委員会委員長)

1. 評議員会開催にあたり，角野会長から挨拶があった。
2. 庶務幹事により定足数が確認された。会長，評議員 10名の出席，2名の委任状出席があり，評議員会は成立した。
3. 評議員会議長として西田佐知子氏が，議事録署名人として西田治文氏，村上哲明氏の2名が選出された。

4. 報告事項

- 4.1. 自然史学会連合関連報告 2012年度活動報告および2013年度活動計画。
- 4.2. 日本分類学会連合報告 2012年度活動報告および2013年度活動計画。
- 4.3. 植物分類学関連学会連絡会報告 2012年度活動報告および2013年度活動計画。
- 4.4. 学術会議若手アカデミー報告 2013年度活動計画。
- 4.5. 各種委員会に関する報告
 - (1) 編集委員会 英文誌『APG』および『分類』の編集状況。
 - (2) 学会賞選考委員会 日本植物分類学会賞の選考経過。
 - (3) 論文賞選考委員会 日本植物分類学論文賞の選考経過。
 - (4) 植物データベース専門委員会 現状説明と活動報告。
 - (5) 絶滅危惧植物・移入植物専門第一委員会 現状説明と活動報告。
 - (6) 絶滅危惧植物・移入植物専門第二委員会 現状説明と活動報告。
 - (7) 国際植物命名規約(メルボルン規約)邦訳委員会 現状説明と活動報告。
- 4.6. 図書関連報告 寄贈雑誌・交換状況の説明。
- 4.7. 日本植物分類学会講演会報告 2012年度実施，2013年度準備状況。
- 4.8. ニュースレターに関する報告 2012年度実施，2013年度準備状況。
- 4.9. ホームページ・メーリングリスト関連報告 学会公式 HP および ML の運用状況。
- 4.10. 会務報告 2012年度の事業報告。
- 4.11. 会計報告 2012年度の会員状況，会費納入状況。
- 4.12. その他
 - (1) 野外研修会について 2012年実施報告。

5. 審議事項

5.1. 2012年度事業報告(案)について

志賀庶務幹事より2012年度事業報告(案)が提案され，質疑後，1項目の追加が行われた後に承認された。

5.2. 2012 年度決算報告 (案) について

保坂会計幹事より 2012 年度決算報告 (案) が提案され、質疑後、承認された。

5.3. 2013 年度事業計画 (案) について

志賀庶務幹事より 2013 年度事業計画 (案) が提案され、質疑後、2 項目の追加・削除が行われた後に承認された。

5.4. 2013 年度予算 (案) について

保坂会計幹事から 2013 年度予算 (案) が提案され、質疑後、2 項目の削除・修正が行われた後に承認された。

5.5. 名誉会員の推薦について

角野会長より名誉会員の条件 (会則第 5 条) を満たしている会員がいないため、本年は名誉会員の推薦を行わないことが報告された。

5.6. 除名について

角野会長より 4 年分以上の会費を滞納している会員 9 名の除名について提案があり、審議の結果、承認された。

5.7. 次期監事の選出について

吹春俊光氏と五百川裕氏を総会に推薦することが了承された。

6. その他

6.1. 第 13 回大会開催地について

角野会長より説明があり、高宮正之氏 (大会会長: 熊本大学) のお世話により、熊本市において 2014 年 3 月 20 日～23 日の日程で開催されることが承認された。

6.2. 植物分類学会日中韓 3 国シンポジウム (2014 年) 進捗状況

角野会長より進行状況の説明があった。

6.3. 普及のための教育委員会 (仮称) の編成準備について

角野会長より進行状況の説明があった。

6.4. 英文誌 (APG) の発行の遅れを取り戻すための具体策

田村編集委員長より定期的な英文誌発行を維持していく方策が提示され、承認された。

6.5. 千葉県印西市のオキナグサ自生地保全の要望書について

角野会長より経緯の説明があり、要望書を提出することが承認された。

6.6. 総会議事について

志賀庶務幹事より 2013 年度総会議事次第 (案) 説明され、承認された。

2013 年度総会議事抄録

庶務幹事 志賀 隆

会場: 千葉大学西千葉キャンパス構内 けやき会館

日時: 2013 年 3 月 16 日 16:30 ~ 17:30

1. 総会に先立ち角野会長から挨拶があった。
2. 綿野泰行大会会長から挨拶があった。
3. 逝去された学会員への黙禱が捧げられた。
4. 志賀庶務幹事より総会出席者が 91 名 (後に 96 名) であることが報告された。
5. 綿野泰行氏が総会議長に選出された。

6. 報告事項

6.1. 会務報告

志賀庶務幹事より、報告内容は第一号議案と同じであるので議案審議の際に報告するとの説明

があった。

6.2. 会員数について

保坂会計幹事より、通常会員数が減少傾向にはあるものの、名誉会員の増加による減少と会費滞納による除名によるものが主であることが説明された。

6.3. 各委員会からの報告

・編集委員会

田村編集委員長から編集状況の説明があった。4月に63巻3号を発行予定であり、現在集まっている論文で64巻1号～3号を編集できる見込みであるとの報告があった。また、定期的な英文誌発行を今後も維持していくために、歴代会長に英文総説20ページを依頼し、各巻3号に掲載する方向で準備を進めているとの報告がなされた。

・絶滅危惧植物・移入植物専門第一委員会

角野会長から、環境省に提出した評価選定リスト案と報告書をもとに現在レッドデータブックの編集が進められているとの説明があった。また、2013年度から委員会名を「絶滅危惧植物専門第一委員会」「絶滅危惧植物専門第二委員会」に変更する旨の報告があった。

・絶滅危惧植物・移入植物専門第二委員会

樋口委員長に代わり保坂会計幹事から、環境省に提出した評価選定リストをもとに現在レッドリストとして公表されており、レッドデータブックの改訂作業が進められているとの説明があった。

・植物データベース専門委員会

伊藤委員長に代わり海老原委員から、日本分類学会連合より国内の維管束植物標本の実態把握の依頼があり、情報集約を進めているとの報告があった。

・国際植物命名規約(メルボルン規約)邦訳委員会

大橋委員長に代わり仲田委員から、翻訳、編集作業の進行状況の説明があり、2013年12月に出版予定であることが報告された。

・学会賞選考委員会、論文賞選考委員会、大会発表賞選考委員会

総会前の記念講演会および表彰式において、審査結果の報告が行われた。

6.4. 除名について

角野会長より、会則第10条にもとづき以下の9名について除名を行ったとの報告があった。笹富 広一郎、長谷川 康雄、渡辺 良象、菊川 亮、小此木 明、深町 真由、江夏 友美、中島 優、千川 慶史。

7. 審議事項

7.1. 第一号議案 2012年度事業報告、ならびに2012年度決算報告書の承認の件

前年度の事業報告と決算報告が志賀庶務幹事と保坂会計幹事よりそれぞれ行われた。池田監事より、会務および会計が適切に行われているとの監査報告があった。しかし、会計の繰越金額が多額であり、発行が遅れている英文誌APGの定期的な発行が必要であるとの指摘があった。

審議の結果、賛成91票、反対5票で出席者(96人)の3分の2以上をもって承認された。

7.2. 第二号議案 2013年度事業計画、ならびに2013年予算案承認の件

志賀庶務幹事と保坂会計幹事より上記二件について説明があった。

審議の結果、賛成91票、反対5票で出席者(96人)の3分の2以上をもって承認された。

7.3. 第三号議案 次期監事の推薦について

役員等の選出についての細則第6条に基づき、評議員会から五百川裕(上越教育大学)、吹春俊光(千葉県立中央博物館・海の博物館)の両氏が推薦され、賛成91票、反対5票で、出席者(96人)の3分の2以上をもって承認された。

8. その他

8.1. 第13回大会開催地について

角野会長より次回第 13 回大会についての告知がなされ、高宮次期大会会長より挨拶があった。

8.2. 野外研修会について

西野委員より、広島県の八幡高原を中心とした芸北地方の湿原群やブナ林にて開催予定であることが説明された。

8.3. 千葉県印西市のオキナグサ自生地保全の要望について

角野会長より千葉県印西市のオキナグサ自生地（通称そうふけっぱら）の現状についての説明があり、自生地保全に関する要望書の提出が提案され、異議なく了承された。

8.4. 絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律（種の保存法）に改正に関する意見書の提出について

藤井伸二氏より、種の保存法の改正に関する説明と、これについて環境省への意見書提出の要望があり、執行部、評議員会で検討することが了承された（提出した意見書はニュースレター本号に掲載）。

2013 年度事業計画および予算

庶務幹事 志賀 隆

(1) 集会等の開催

学術集会、講演会、研修会

年次学術集会（日本植物分類学会第 12 回大会：3 月 14 ～ 17 日 千葉大学西千葉キャンパス）を開催する。

2013 年度講演会（12 月 21 日（土）、大阪学院大学）を開催する。

2013 年度野外研修会（広島県芸北地方）を開催する。

総会、評議員会

年次総会を年次学術集会に合わせて開催する（3 月 16 日）。

評議員会を開催する（3 月 14 日）。

(2) 出版物の刊行

学会誌の発行

英文誌『Acta Phytotaxonomica et Geobotanica』第 63 巻 2, 3 号、および第 64 巻 1 ～ 3 号（計 5 冊）を発行する。

和文誌『分類 [日本植物分類学会誌]』第 13 巻 1 ～ 2 号（計 2 冊）を発行する。

ニュースレター『日本植物分類学会ニュースレター』48-51 号（計 4 冊）を発行する。

(3) 委員会活動

以下の委員会を組織し、目的に沿って活動する。

絶滅危惧植物専門第一委員会

絶滅危惧植物専門第二委員会

植物データベース専門委員会

学会賞選考委員会

大会発表賞選考委員会

論文賞選考委員会

国際植物命名規約（メルボルン規約）邦訳委員会

2012年度決算

収入の部	単価	数	予算	決算	予算との差異
会費					
通常（一般）	5000	755	3775000	4746580	△ 971580
通常（学生/海外）	3000	91	273000	279000	△ 6000
団体会員	8000	26	208000	240000	△ 32000
バックナンバー販売			100000	166085	△ 66085
命名規約販売			20000	25000	△ 5000
利息			500	1042	△ 542
雑収入			50000	133570	△ 83570
小計			4426500	5591277	△ 1164777

注1

支出の部	単価	数	予算	決算	予算との差異
大会補助費			100000	100000	0
講演会補助費			50000	71740	△ 21740
出版物印刷費					
APG vol. 62(2/3), 63(1)	650000	5	3250000	1267770	1982230
分類vol. 12(1, 2)	550000	2	1100000	1099560	440
ニュースレターNo. 44-47	55000	4	220000	202950	17050
英文校閲費			100000	80000	20000
出版物送料					
APG送料	80	5500	440000	72190	367810
和文誌送料	80	2000	160000	137251	22749
NL送料	60	4000	240000	112186	127814
会議費			50000	89633	△ 39633
学会賞表彰経費			60000	58452	1548
自然史学会連合負担金			20000	20000	0
分類学会連合分担金			10000	10000	0
事務局管理費					
消耗品費			50000	23268	26732
交通費			100000	130750	△ 30750
アルバイト賃金			300000	383021	△ 83021
封筒等印刷費			0	0	0
通信費（小包手数料を含む）			70000	18090	51910
手数料・その他			30000	24450	5550
自動振替集金代行基本料			3150	3150	0
自動振替口座確認手数料	126	170	21420	24423	△ 3003
自動振替新規手数料			0	0	0
レンタルサーバー使用料			20000	25200	△ 5200
国際シンポジウム積立金			300000	300000	0
予備費			150000	164000	△ 14000
合計			6844570	4418084	2426486

注2

注3

注4

注4

注4

注5

注6

注7

注8

注9

単年度収支	△ 2418070	1173193	△ 3591263
前年度からの繰越金	10121805	10121805	0
次年度への繰越金	7703735	11294998	△ 3591263

注1：植物分類地理学会の口座解約に伴う振替払出及び著作権使用料

注2：予算時に計画した5号分のうち、APG63(2, 3)は2013年度へ繰り越し

注3：為替レート（円高）により減額

注4：複数誌の同時発送により節約

注5：幹事引継のための会議および評議員会議費を含む（会議室代、お弁当代）

注6：幹事引継会議を含む

注7：年始年末の会計作業補助および年次大会における会計作業補助

注8：一部プラン変更に伴う料金変更

注9：選挙用紙送付および学会賞受賞者の大会参加補

特別会計 2012年度決算

収入	2012年度予算	2012年度決算	予算との差異
前年度繰越金	2196011	2196011	0
国際シンポジウム積立金	300000	300000	0
寄付（第11回大会準備委員会）	0	400000	400000
利息	0	0	0
合計	2496011	2896011	△ 400000
支出			
命名規約和訳出版	200000	0	△ 200000
国際シンポジウム準備金	0	0	0
日中韓シンポジウム若手派遣	0	50000	50000
次年度への繰越金	2296011	2846011	550000
合計	2496011	2896011	△ 400000

注2

注3

注1：2012年大会運営費からの余剰分。

注2：メルボルン規約原文出版の遅れのため。

注3：1人を派遣した。

2013年度予算

収入の部	単価	数	予算	前年度予算との差異
会費				
通常（一般）	5000	735	3675000	△ 100000 注1
通常（学生/海外）	3000	92	276000	3000 注1
団体会員	8000	24	192000	△ 16000 注1
バックナンバー販売			100000	0
命名規約販売			20000	0
利息			1000	500 注2
雑収入			50000	0
合計			4314000	△ 112500

支出の部

大会補助費			100000	0
講演会補助費			50000	0
出版物印刷費				
APG vol. 63 (2, 3), 64 (1, 2, 3)	650000	5	3250000	0 注3
分類vol. 13 (1, 2)	550000	2	1100000	0
ニュースレターNo. 48-51	55000	4	220000	0
英文校閲費			50000	△ 50000 注4
出版物送料				
APG送料	80	5500	440000	0
和文誌送料	80	2000	160000	0
NL送料	60	4000	240000	0
会議費			50000	0
学会賞表彰経費			60000	0
自然史学会連合負担金			20000	0
分類学会連合負担金			10000	0
事務局管理費				
消耗品費			50000	0
交通費			100000	0
アルバイト賃金			470000	170000 注5
封筒等印刷費			250000	250000 注6
通信費（小包手数料を含む）			70000	0
手数料・その他			30000	0
自動振替集金代行基本料			3150	0
自動振替口座確認手数料	126	170	21420	0 注7
自動振替新規手数料			0	0 注8
レンタルサーバー使用料			26000	6000 注9
国際シンポジウム積立金			300000	0 注10
予備費			100000	△ 50000 注11
合計			7170570	326000

単年度収支	△ 2856570
APG63 (2, 3) を除いた単年度収支	△ 1380570
前年度からの繰越金	11294998
次年度への繰越金	8438428

- 注1：会員数見直しによる（名誉会員増、退会・除名・逝去など）
注2：前年度までの実績に応じて変更
注3：2012年度未発行分（vol63 no. 2, 3）を含める
注4：前年度までの実績に応じて変更（2人→1人）
注5：編集業務補助を追加した他、前年度までの実績に応じて増加
注6：執行部変更にもとない新たな封筒印刷が必要になるため
注7：自動振替サービス利用者数変更による
注8：新規手数料がかからなくなったため
注9：前年度実績に応じて変更
注10：2014年度も30万円を計上予定
注11：選挙および幹事引継が無いため

特別会計 2013年度予算

収入	2013年度予算	前年度予算との差異
前年度繰越金	2846011	650000
国際シンポジウム積立金	300000	0 注1
利息	0	0
合計	3146011	650000
支出		
命名規約和訳出版	1800000	1600000 注2
国際シンポジウム準備金	0	0
日中韓シンポジウム若手派遣	350000	350000
次年度への繰越金	996011	△ 1300000
合計	3146011	250000

- 注1：2012年度より一般会計から移管。2014年度も30万円を移管予定。2014年に90万円支出予定。
注2：出版にもとない経費（会議費含む）。2012年度に未執行分（20万）を追加計上。

(4) 表彰

日本植物分類学会賞 (学会賞・奨励賞) の授与を行う。

日本植物分類学会大会発表賞の授与を行う。

日本植物分類学会論文賞の授与を行う。

(5) 国内外の関係学術団体との連携・協力

国内学会連合等への参加・連携を行う：日本学術会議，植物分類学関連学会連絡会，自然史学会連合，日本分類学会連合など。

The Korean Society of Plant Taxonomist (KSPT)，および Taxonomy and Evolution Division, the Botanical Society of China (BSC) と連携する。

2012 年度にひきつづき，牧野富太郎博士生誕 150 年記念展『植物学者・牧野富太郎の足跡と今』(2012 年 12 月 22 日～2013 年 3 月 17 日：国立科学博物館本館) などへ協力をを行う。

(6) その他

学会刊行物のバックナンバー等の販売と整理を行う。

植物分類学関連情報 (学術集会，研究動向，出版物，公募) を収集し，ニューズレター，ホームページ等で提供する。

学会刊行物の国内外の研究機関への寄贈と交換を行う。

植物分類学マニュアルの作製を進める。

牧野富太郎生誕 150 年記念展「植物学者 牧野富太郎の足跡と今」

開催のご報告

田中 伸幸 (高知県立牧野植物園)

2012 年は牧野富太郎博士の生誕 150 年にあたり，高知県立牧野植物園では，国立科学博物館と共催で 2012 年 6 月 16 日 (土)～9 月 23 日 (日) に，「植物学者 牧野富太郎の足跡と今」を開催した。また，12 月 22 日 (土)～2013 年 3 月 17 日 (日) には，東京上野の国立科学博物館で開催された。日本植物分類学会にも後援団体としてご協力を頂いたので，この場をお借りしてお礼申し上げますと共にご報告をしたい。

牧野富太郎，その人となり，そして彼の学術的な業績については良く知られている。このことは彼が収集した膨大な標本資料とそれらに基づく日本産植物相の研究や日本各地での教育普及活動などから理解される。しかしながら，これまでそれらは過去形で語られることが多かった。牧野生誕 150 年を機に，本展では，牧野の仕事が後世の研究者や植物愛好家などにどのような影響を及ぼしたか，という点に焦点をおいて時間軸を現在において紹介した。この展示を通じて，牧野の仕事が，その後，様々な分野，後世の研究者

や植物愛好家などにどのような影響をおよぼしたかについて約 300 点の展示資料をもとに紹介し，今一度，牧野富太郎の業績について考えるものとした。

本展は大きく 2 つのパートにわけて展示を行った。一つは，牧野富太郎の研究業績とその後，もう一つは，教育普及活動とその後に焦点をあてた展示である。研究活動とその後については，牧野富太郎の記載種について，高知県に関わりの



高知県立牧野植物園での展示の様子

ある植物（ツチトリモチ、カンアオイ、タムラサキ、バイカオウレン、ナベワリ）のその後の分類学的研究について紹介した。牧野が遺した基礎的な学術的知見とその後の研究の展開、発展について紹介した。植物図では種としての特徴を描こうとする牧野式植物図の紹介を行った。また、併せて牧野富太郎に師事した植物画家の紹介をその作品と共に展示した。手紙などを通して研究者から一般の方まで広く交流があったことを表現し、関西の拠点となった神戸、特に交流の深かった東京、横浜、仙台に焦点を絞り、それぞれの地域での同好会や研究会での牧野富太郎の活動と、彼に師事した人々が地方の植物研究にどのように貢献し、現在に至っているのかについて紹介した。さらに、生物学御研究所の昭和天皇標本を最初に鑑定したのは牧野富太郎である。国立科学博物館・昭和記念筑波研究資料館の標本3点を展示し、昭和天皇と牧野富太郎の関わりを展示した。最後に、牧野富太郎の出身地である高知県佐川町では、今も残る牧野への畏敬の念として、町内の小中学校での理科の夏休み自由研究課題の優秀な作品に対して、「牧野科学賞」など牧野の名を冠した賞を与えていることから実際の作品を展示することで郷里に生

き続ける牧野像を紹介した。また、高知県各地に残る牧野富太郎の足跡として、高知県幡多郡大月町と三原村の活動「牧野富太郎の道を歩く」を紹介した。

サイドイベントとしては、本展に関連したシンポジウム「現代に生きる牧野富太郎」を6月23日（土）に開催した。「研究活動に生きる牧野富太郎」および「社会活動に生きる牧野富太郎」の二部構成で、それぞれ3名ずつ、計6名の演者の方々に講演していただいた。2013年2月24日（日）には、「現代に生きる牧野富太郎：企画展にまつわるあれこれ」と題して、両園・館の担当研究者による講演会を上野の国立科学博物館で実施した。さらに、3月初めに東京での牧野ゆかりの地を巡るツアーを高知で募集し、JTB主催で実施した。

150年展に関連して、今後、牧野富太郎の図に影響を受けた研究家や植物画家の植物画を「牧野植物図の継承者たち」として展示する予定である。シリーズ第1回目として現在、牧野植物園では「川崎哲也桜図譜展」を6月9日（日）まで開催中である。そちらにもぜひ足をお運びいただければ幸いである。

お知らせ

2013年度野外研修会のお知らせ

野外研修会担当委員 西野 貴子

「広島県八幡高原の植物」

日程：2013年8月31日（土）～9月2日（月）、2泊3日、雨天決行。国土地理院1;25,000図幅「臥竜山」を参照。

経費（宿泊費・バス代など）約25,000円の予定。現地で徴収します。

第1日（8月31日）12：00 広島駅新幹線口に集合、三段峡交通のマイクロバス（小豆色）に乗車して下さい。14：00 広島県山県郡安芸太田町深入山「いこいの村広島」に到着、ここで2泊。夕食まで、深入山の植物を観察。夕食後、吉野由紀夫（東和科学）『広島県の新しいレッドデータブックについて』、白川勝信（北広島町立高原の自然館）『八幡高原の自然』による紹介を予定しています。

第2日（9月1日）午前中、八幡湿原での観察。午後、臥竜山での観察を予定。夕食後は懇談会と関太郎『Great Smokey Mountainsの植物』を予定しています。

第3日（9月2日）午前中、三段峡で観察。13：00「いこいの村広島」発、15：00 広島駅新幹線口に到着予定。

八幡高原は広島県と島根県の県境に近く、太田川の上流域に位置します。海拔750～800mの高原で、八幡湿原は「ヌマガヤーマアザミ群集」が記載された所で、西日本の代表的な中間湿原です。ヌマガヤ、オオミズゴケ、オオイヌノハナヒゲ、サワシロギク、サワギキョウ、ミヤコアザミ、バイケ

イソウなどが見られます。臥竜山（1223m）は「ブナークロモジ群集」に属する太平洋側と日本海側の中間的なブナ林で、オクノカンスゲ、ハウチワカエデなど日本海側の要素とコハウチワカエデ、クロモジ、タンナサワフタギなど太平洋側の要素が混在しています。八幡高原へは、昭和初期に広島文理科大学の招きにより牧野富太郎博士が訪れており、その記念碑もあります。また、北広島町立高原の自然館があり、ビジターセンターとして、また自然保護活動の拠点としても活発に活動しています。

申し込み：広島県廿日市市平良山手 3 - 26 関 太郎 あて

電話&ファックス 0829-32-5513

メール tarow-193412@hi.enjoy.ne.jp

できるだけメールでお申し込み下さい。期限は 7 月 31 日。25 名で締め切ります。申し込みの際には、氏名（ふりがな）、性別、住所（連絡先）、電話かメールアドレス、広島駅までの交通手段などをご連絡下さい。

日中韓合同シンポジウム (2013) の案内 (予告)

会長 角野 康郎

日本、中国、韓国の 3 国の植物分類学会が中心となって開催してきた合同シンポジウムが、今年は 2013 年 11 月 6 ~ 7 日 (8 日にエクスカージョン) に East Asian Plant Diversity and Conservation 2013 (EAPDC 2013) として韓国で開催されるという連絡がありました。

このシンポジウムに日本から参加し、講演する方 2 名を招待できるという申し出がありました。分類学会から候補を推薦するように依頼がありましたが、今回は招待候補者を公募することにしました。

シンポジウムに参加し、招待講演にふさわしい内容の講演 (単なる研究発表ではない) をしてみようという方は、6 月 30 日までに、講演タイトル (仮題で可) と内容の概要を添えて、植物分類学会庶務幹事 <shiga@ed.niigata-u.ac.jp> まで応募して下さい。

また、別途、若手の参加者には派遣のための助成金制度がありますので、ふるっての参加を呼びかけます。

詳細は判明次第ホームページ等でお知らせします。

日本植物分類学会第 13 回大会のお知らせ

第 13 回大会会長 高宮 正之

日本植物分類学会第 13 回大会を、下記の通り、熊本大学黒髪南地区キャンパスにおいて開催いたします。大会および参加申し込み等の詳細は、大会ホームページおよび第 51 号のニュースレターでお知らせいたします。多数のご来熊をお待ちいたします。

【会場】熊本大学 工学部 2 号館 (熊本市中央区黒髪 2-39-1)

【日程】2014 年 3 月 20 日 (木) : 各種委員会, 評議員会 (熊本大学黒髪南地区キャンパス)

3 月 21 日 (金) ~ 22 日 (土) : 研究発表, 総会, 受賞講演, 懇親会など

3 月 23 日 (日) : 研究発表, 公開シンポジウム

【ホームページ】現在作成中、アクセス可能になり次第、分類学会ホームページ等にてご連絡いたします。

【問い合わせ先】日本植物分類学会第 13 回大会準備委員会

〒860-8555 熊本市中央区黒髪 2-39-1

熊本大・院・自然科学 副島顕子 (大会準備委員長)

Tel & Fax: 096-342-3448; E-mail: soejima@sci.kumamoto-u.ac.jp

寄稿

大学連携バイオバックアッププロジェクト (IBBP) — —誰もが利用できる生物遺伝資源のバックアップ拠点形成—

成瀬 清 (基礎生物学研究所 IBBP センター) naruse@nibb.ac.jp

大学連携バイオバックアッププロジェクト (IBBP) とは

平成 23 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災では、東北地方を中心に多くの大学・研究所が被災いたしました。震災による直接的な被害とともに長期間の停電によって、恒温室やフリーザーの維持が不可能になり、実験研究に用いる変異体や遺伝子導入個体など長年の努力によって作成してきた貴重な系統、cDNA/ゲノムクローンのような研究になくてはならない実験材料など多くの生物遺伝資源が失われました。その結果、研究の遅滞や研究方向の転換を余儀なくされた研究者も多くおいでになります。規模の違いはあれ、そのような災害や事故は今後も起きる可能性があると考えられます。

予期しない生物遺伝資源の喪失を防ぎ、我が国の生命科学研究の災害対応能力を高めることを目的として平成 24 年 6 月より開始された国家プロジェクトが IBBP(<http://www.nibb.ac.jp/ibbp/>) です。このプロジェクトでは生物遺伝資源バックアップの中核施設である大学連携バイオバックアップセンター (IBBP センター) を基礎生物学研究所に設置し、連携する 7 大学 (北海道大学, 東北大学, 東京大学, 名古屋大学, 京都大学, 大阪大学, 九州大学) とともに、研究途上にある生物遺伝資源を中心にバックアップ保管を行い、災害や事故により研究者が保持する生物遺伝資源が失われた際には速やかにバックアップ保管している生物遺伝資源をお返しすることで、研究の迅速な再開を支援します。また IBBP センターに設置した分注用ロボット、レプリカ作成装置、コロニーピッカー、キャピラリーシークエンサー、クリーンベンチ、プログラムフリーザー等の機器 (<http://www.nibb.ac.jp/ibbp/ibbp-center/facilities.html>) を用いてバックアップ用のサンプル調整、ライブラリーのコピーや中規模な塩基配列決定、ライブラリースクリーニングシステムの構築などを支援いたします。このような支援によって研究者がもつ生物遺伝資源の付加価値を向上させることもプロジェクトの重要な活動の一つとなっています。

バックアップ保管及び返却のプロセス (図1参照)

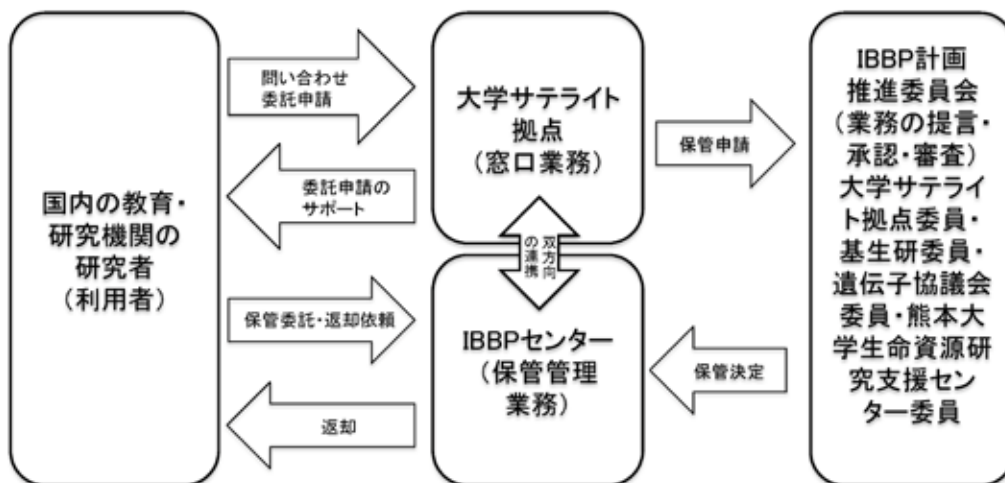
バックアップ保管の依頼はまず保管審査申請書・研究計画調査票・データシートを IBBP センターホームページよりダウンロード (<http://www.nibb.ac.jp/ibbp/application/>) するとともに、それぞれの地域を担当する大学サテライト拠点 (<http://www.nibb.ac.jp/ibbp/satelight/>) に連絡を行います。大学サテライト拠点の担当者と相談しながら保管審査申請書など IBBP 計画推進委員会での審査に必要な一連の書類を共同で作成をお願いします。作成した保管審査申請書等は大学サテライト拠点を通じて IBBP 計画推進委員会に提出されます。その後 IBBP 計画推進委員会は保管審査申請書等の記載に基づきバックアップ保管を行うのかどうかの決定を行います (審査の基準 <http://www.nibb.ac.jp/ibbp/guide/> を参考にしてください)。審査結果は審査を依頼した研究者 (利用者) と担当の大学サテライト拠点に通知されます。バックアップ保管決定後は IBBP センターと利用者が直接打ち合わせを行い、バックアップ用生物遺伝資源の送付の方法やその日時などを決定します。バックアップ用の生物遺伝資源を新たに作成する場合には、2 次元バーコード付き凍結保存チューブやレプリカ作成用 384 穴プレートなどを IBBP センターから提供いたしますので、それを用いてサンプルを作成して下さい。既にバックアップ用サンプルがある場合には、紙製の保管容器をお送りしますので、その保管容器に同時に送付したバーコード付きのサンプルシールを貼った上で、ドライシッパーを用いて凍結状態で IBBP センターまで送付をお願いします。送付に必要なドライシッパー等もセンターから利用者にお送

ります。送付されたサンプルは直ちに液体窒素保存容器に保管されます。利用者は保管中のサンプルの数、保管場所、保管審査時に記載したデータなどの情報をインターネット経由でいつでも見ることができます。保管している生物遺伝資源の返却を希望する場合は、生物遺伝資源返却願いをIBBPセンターに直接提出してください。返却願いの受理後、速やかに凍結状態にて利用者に返却いたします。サンプルは一部のみを返却することも可能です。すでに述べたように、バックアップ保管が認められた研究者は、IBBPセンターの機器を利用できます。機器の利用を希望する方は施設利用申込書に希望する機器の種類、期間、利用人数と目的を記載して、IBBPセンターまで提出をお願いします。機器利用では交通費と宿泊費をIBBPセンターから補助することができます。

新規長期保存技術開発を目指した共同利用研究の実施

研究に利用される様々な生物遺伝資源は、必ずしも安定した長期保存技術が確立されているとは限りません。長期保存技術が確立されていない生物遺伝資源は、現状ではIBBPセンターでのバックアップ保管が困難です。そこで平成25年度よりそのような生物遺伝資源を対象に、新規長期保存技術開発を目的として共同利用研究をIBBPとして実施することとなりました。この共同利用研究では生物遺伝資源のバックアップ保管を推進するため新規保存技術の確立および基礎的な低温生物学的研究を他研究機関の研究者あるいは所内の研究者が、基礎生物学研究所の施設（IBBPセンター、生物機能解析センター（生物機能情報分析室、光学解析室、情報管理解析室）、モデル生物研究センター）および大学サテライト拠点の専任職員と共同して行う研究です。一件あたり年間200万円程度を上限に研究費（旅費、滞在費及び消耗品費）を補助することができます。この共同利用研究開始の準備が整い次第、基礎生物学研究所IBBPセンターのホームページにて広報を行います。

IBBPは国内の全ての研究者が利用可能な生物遺伝資源のバックアップ拠点形成を目指した日本初のプロジェクトです。利用しやすいプロジェクト運営を心がけることで、より多くの研究者に利用されるように、このプロジェクトを育て、日本の生命科学研究の災害対応能力を高め、その安定した発展をサポートいたします。



<http://www.nibb.ac.jp/ibbp/guide/flow.html>

図1. IBBPにおける生物遺伝資源バックアップの保管及び返却のプロセス

植物研究会・同好会紹介 [新企画]

「すげの会」

正木 智美 (すげの会庶務幹事)

「すげの会」はスゲ属植物を中心とするカヤツリグサ科植物の情報交換を目的として、1990年に発足しました。当初の会員は90名前後でしたが、現在会員数は300名を越え、北海道から沖縄まで日本全国にわたっています。

会の主な活動は、年1回の会報および年2～3回のニュースレターの発行と、全国大会です。会報は12号(12号から”莎草研究”に名称変更)まで発行しており、採集記録、スゲ属植物の分類の解説、研究報告などを載せています。毎年開催される全国大会では、研究発表会、



昨年(2012年)の全国大会記念写真(宮崎県家田湿原にて)

簡単な分類の講習会、採集会、標本同定会、懇親会を行っています。標本同定会では、参加者がそれぞれの地域から持ち寄った標本を囲んで、同定するのですが、例年この同定会が最も白熱し、幾つかのグループに分かれて夜遅くまで続きます。また、2007年3月より、年1～2回春と秋に「すげの会標本同定会」を開催しています。さらに、2009年から「日本カヤツリグサ科植物分布図作成」のプロジェクトを立ち上げました。その先駆けとして、カヤツリグサ科スゲ属植物の分布図作成に着手しております。スゲ属植物は属内に250種以上あり、高等植物の中で最も多い種数を有する分類群です。この分布図を作成するために、日本全国の研究機関と博物館に標本データの提供をお願いしております。2013年4月現在、約半数の分布図を作成することが出来ました。作成した分布図は、紙ベースまたはPDF版で会員に配布してデータチェックを依頼し、順次、追加訂正と修正を行っております。

カヤツリグサ科は分類するのが困難なグループとして知られています。特にスゲ属は日本に250種以上あり、高等植物の中で属内の種数が最も多く、互によく似た形質を持っています。区別するにはルーペか実体顕微鏡で微細な形質を見なければなりません。検索表を利用するにしても、例外が多く、しかも、使われている用語がスゲ属固有のものが多く苦労します。

スゲ属植物は地域固有種が多いことでも知られています。同種とされていても、地域によって葉や花形態にわずかな違いがあるものも多数あります。このような植物群は、我々が知らないうちに絶滅したり、絶滅の危機にさらされているものも多いと考えられます。したがって、それぞれの地域でスゲ属植物の分類ができる人が育つ必要があります。「すげの会」は、カヤツリグサ科植物の図鑑を整備し、分類を始める方に役立つ情報を提供するとともに、日本全域の分布調査を行い、スゲ属植物の保護に役立てる予定です。

web サイト

すげの会 The Japanese Society of Cyperology

<http://hos0.big.ous.ac.jp/~suge/index2.htm>

年会費：3,000円(学生500円)

入会方法：

以下の必要事項をメールまたは郵便でお知らせ下さい。

日本スゲの会に入会を希望します。

名前：

郵便番号：

住所：

電話番号：

宛先：

〒700-0005

岡山県岡山市北区理大町 1-1

岡山理科大学 生物地球学部 生物地球学科

星野研究室内「すげの会」

星野卓二まで

E-mail hoshino@big.ous.ac.jp

